

第 章 附属幼稚園

1 . 理念・目的

附属幼稚園は、奈良教育大学学則第 26 条(3 ページ)により、幼児の保育に関する研究、並びに教育実習計画に従って教育実習を実施するために、大学の附属学校として設置されている。また、附属幼稚園は、幼稚園として学校教育法第 22 条により、「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」を目的としている。

この目的の下、国立大学法人奈良教育大学は、中期目標に「附属学校の基本的目標」として次の 3 つを掲げ、附属幼稚園では、この基本的目標に基づいた運営を行っている。

国立大学法人奈良教育大学中期目標 . 3 (2) 附属学校に関する目標

附属学校の基本的目標

- ・ 大学の附属学校園として、幼稚園・小学校・中学校教育の在り方を大学との共同研究のもとに理論と実践の両面から研究し、これからの時代にふさわしい教育の構築を目指す。
- ・ 実践及び実践開発の成果を広く外部の学校関係者に公開する。
- ・ 大学学部と連携し、教育実習プログラムによる、より質の高い実習を行う。

即ち、大学との共同研究により、幼児教育の理念及び実践に関する研究を行い、広く外部の教育機関にその成果を公表するとともに、これからの時代に呼応する幼児教育の構築を目指すものである。また、大学の附属学校として、教育実習だけでなく大学教員や学生の教育実践の場を提供し、実践を生かした質の高い教育者養成を行うものである。

附属幼稚園では、幼児の実態や園の実情に即応した独自の教育課程を編成し、日々の保育にあたっている。幼稚園の主体者である一人ひとり個性の違う園児が、それぞれの良さを発揮しながら共に伸びていけるように、そして、園児にとって幼稚園が何より楽しいところであるようにという 2 点を附属幼稚園の教育の基本とし、教育課程には次のとおり 3 つの目標と 8 つの特色を掲げている (資料 3 - 1)

教育目標

- ・ 生き生きと遊ぶ子ども
- ・ 友達と一緒に伸びる子ども
- ・ 精一杯がんばる子ども

・附属幼稚園

特 色

『豊かな自然に囲まれたこころもからだも育つ幼稚園』

幼児の主體的な遊びを大切に、ねらいが総合的に達成されるようにする。幼児が自ら遊びを見つけ、積極的に自分のやりたいことに取り組めるようにし、生きる力の基礎をはぐくむようにする。

生きていくうえでの基礎となる人とかかわる力を身に付けていけるようにする。嬉しさ、喜びとともに様々な葛藤も経験しながら人の思いに気付き、人として大切な心の育成を図っていく。

元気にたくましく生きていくために、健康な体づくりを目指す。広い園庭を活用し、のびのびと体を動かしながら、戸外での遊びを十分に体験できるようにする。

園内外の恵まれた自然環境を最大限に生かし、幼児の豊かな感性を培う。特に園内にある“子どもの森”では、四季折々の自然の中で五感を働かせながら様々な体験ができるようにする。

親や教師の成長が幼児の健やかな成長につながると考え、「親子で育つ幼稚園」を目指す。保護者との連携を密にして、幼稚園が幼児と保護者と教師がともに成長する場となるようにする。

奈良教育大学の附属という特色を生かし、大学の施設や教職員とも連携をとり、様々な体験ができるようにする。

抽選によって園児を受け入れており、様々な個性の幼児と一緒に生活している。その良さを生かし、お互いの個性を認め合い、影響しあいながらともに育っていくことを目指す。

園内の教職員が話し合いを密にし、一致協力して幼児の保育にあたる。

2 . 教育研究活動

[現状の説明]

幼稚園の理念と目的に添って、園児、保護者、幼稚園の現状を踏まえ、今までの教育研究「親子で育つ幼稚園」、「自尊心の育ちを考える」等の成果を生かした様々な取組を実践している。特に、学校教育法に明記されている保護者への教育支援に関しては、研究の成果を踏まえた実践を継続し、成果を上げていると考えている。

(1) 教育活動

保育室降園

毎週水曜日の降園時に、親子の時間を設けている。保護者に保育室まで迎えに来てもらい、保育室や園児の様子を見せるとともに、親子で一緒に歌を歌ったり触れ合い遊びをしたりして降園する。保護者に幼稚園での様子を知ってもらうことと、家庭に帰ってからの親子の遊びや会話のきっかけを作ること、親子で触れ合う楽しいひと時を過ごすことを通じて、保護者に子育てを楽しみと感じてもらい、豊かな親子関係が育まれるように考えている。

小さな懇談会と父親懇談会

希望する保護者同士が気軽に寄り集まっておしゃべりし、いろいろな人と知り合ったり、いろいろな意見や考えを聞いたりできる情報交換の場として、「小さな懇談会」を実施している。月に1回程度、学年やクラスを離れて少人数の保護者がテーマについて話し合える懇談会である。

また、子育てには、母親だけでなく父親の参画が必要であると考え、土曜・日曜日に父親のための参観日を設定し、父親対象の講演会や父親参加の懇談会を行っている。子育てに関わりにくい父親が他所の家庭の様子を聞くことで子育てに関心を持ち、母親の苦労を知り、気持ちに寄り添えることが、母親の子育ての活力にもなると考えている。

たんぼぼグループ

附属幼稚園では、公立の幼稚園に比べて広い範囲から通園しており、園児も保護者も、ともすれば地域との関わりが希薄になる傾向がある。幼稚園に通う経路が同じ親子を1グループ(たんぼぼグループ)として異年齢混合の集団を作り、降園時間に集まって一緒に遊んだり話し合いを持ったりまとまって降園したりして、近隣に住む親子が繋がり合えるようにと考えている。

異年齢保育

週に1回1時間程度、異年齢の2人組で活動する日を作っている。自ら選んだ相手との遊びを楽しんだり、遊びを伝え合ったり、おやつを分け合ったりする。異年齢との関わりが少なくなっている社会の現状を踏まえ、同年齢だけでなく様々な関わりを通して、思いやりや優しさなどの心情面が育つことを期待している。

地域環境を生かした保育実践

附属幼稚園は奈良公園の近くに位置し、文化遺産を含む奈良特有の環境が広がっており、その良さを保育に活用するようにしている。奈良公園、若草山、大仏殿、二月堂などへの遠足やオリエンテーリングをはじめ、奈良町や鹿せんべい工場への見学、ドングリを使った鹿せんべい作りなどの実践を重ねており、園児が地域と関わり、愛着を持ちながら生活できるように考えている。

また、年長児が近隣にある老人福祉施設を訪問し、歌やダンスを見てもらったり、一緒に手遊びをしたりするひとときを持っている。核家族の多い園児が様々な人や様々な年齢層の人達との交流を通じて心豊かに育てるようにと願っている。

(2) 研究活動

学長裁量経費の援助を受けて、また、大学の指導を得て継続的に研究活動を行っている。

「幼児の生活を見つめる 親子で育つ幼稚園をめざして」の研究成果は、先に述べた教育活動の様々な取組として継続して実践している。また、「自尊心の育ちを考える かけがえのない自分を大切に思う心を育む」の研究では、日々の保育の中で自尊心の育ちにつながる事例について「保育カンファレンス」(conference)を実施し、平成18(2006)

・ 附属幼稚園

年にその成果を研究紀要にまとめた。幼児の自尊心を育むことに力を入れ、そのための環境と援助を成果に基づいて実践している。「ひとりひとりが輝く保育をめざして 特別な配慮を必要とする子どもへの教育的支援を考える」の研究は、特別支援教育研究センターの協力を得て、現在も継続している。

研究主題一覧

年 度	主 題	備 考
H10(1998)～H15(2003)	幼児の生活を見つめる 親子で育つ幼稚園をめざして	資料3-2
H16(2004)～H18(2006)	自尊心の育ちを考える かけがえのない自分を大切に思う心を育む	資料3-3
H19(2007)～	ひとりひとりが輝く保育をめざして 特別な配慮を必要とする子どもへの教育的支援を考える	

研究テーマに沿って公開保育研究会を毎年行い、保育公開、学年別・テーマ別の分科会、研究発表、以下の様なテーマに迫る講演を実施した(資料3-4)。研究会には、全国から保育園・幼稚園教諭などの幼児教育関係者が参加し、互いの学びの場となっている。

公開保育研究会

年	演 題	講 師
H15(2003)	これからの幼稚園教育を求めて いろいろな人との連携から	秋田喜代美(東京大学大学院教育学研究科助教授)
H17(2005)	子どもの時間に大切なこと 精神科医の視点より	服部祥子(大阪人間科学大学人間科学部教授)
H18(2006)	自尊心の育ちを考える	鯨岡 峻(京都大学大学院人間環境学研究科教授)
H19(2007)	発達支援の必要な幼時の理解と具体的対応	岩坂 英巳(奈良教育大学特別支援教育研究センター教授)

また、これらの研究成果については、全国規模の研修会で研究提案発表などを行い、広く公表する機会を得た(資料3-5～3-8)。

研究成果の公表内容

年 月	公 表 概 要	公表事項
H19(2007).3	奈良県養護教育研究大会における提案発表	幼稚園の養護教諭の役割
H19(2007).7	全国国立大学法人附属学校連盟幼稚園部研究集会における提案発表	今日的課題
H19(2007).7	第54回全国国公立幼稚園研究協議会奈良大会における提案発表	教師の資質
H19(2007)年度	全国国立大学法人附属学校連盟幼稚園部会 2007年度リーフレット掲載	自尊心

自然領域や幼児教育を専門とする大学教員との共同研究にも取り組んできた(4.大学との連携の項参照)(資料3-9)。園児が食べられる実のなる樹木を植えて幼稚園の自然環境を豊かにしたり、砂場や土の材質についても適切なものに入れ替えたり、保育室に設

置する絵本の点検を行ったりするなど、研究の成果を保育に反映させるとともに、教育実践総合センター研究紀要などで公表している。

平成 19(2007)年度から大学が文部科学省専門職大学院等教育推進プログラムで行うことになった幼保統合の「保育実践知」教育プログラムでは、連携機関として大学に協力し、研究を行うことになっている。

[点検・評価と改善の方策]

様々な保育の取組については、数年間の積み重ねにより定着してきている。特に保護者支援の取組は、保護者が安心して子育てを楽しむ上で効果があると考えている。保護者懇談会等で幼稚園の教育について報告し、保護者の理解を得ながら、幼稚園と保護者が同じ思いで園児の教育に取り組むことができるように継続していく（保護者アンケート結果より 資料 3 - 10）。

また、教師の資質を高めるための保育カンファレンスは、行事や様々な取組のための計画や準備が忙しく時間が取りにくいのが現状であるが、保育を充実させる手立てとして今のペースを持続していきたい。保育カンファレンスには、大学の専門分野の教員を交えて話し合う機会を持ち、大学と共同の研究の場として今後の共通の研究課題も探していきたい。

「親子で育つ幼稚園をめざして」や「自尊心の育ちを考える」の研究成果を保育で実践するとともに、研究発表を通じて外部に公表できた。今後は、それらの研究成果だけでなく、現在の特別支援の研究成果も加えて、教育課程や指導計画に位置づけていくことが課題である。

附属幼稚園で行っている研究の内容は高く評価されており、全国規模の研修会で提案発表を行ったり、希望に応じて他園の教師に保育参観の場を提供したり、宝塚市や北葛城市など他組織の研修会の講師を務めたりしてきた（資料 3 - 11）。今後もこのような機会を活用して、研究成果の公開を進めていきたい。

公開保育研究会を土曜日を開催することによって、参加者が増加した。他園の行事と重なることも多いので、地域のモデル園として多くの教師が公開保育に参加しやすい日程を考えていきたい。また、今後の公開保育研究会には、奈良県や奈良市の教育委員会の後援を受け、研究成果を今まで以上に広く公開し、他の幼児教育機関で活用してもらうようにする。

3 . 教育実習

[現状の説明]

教育実習生の指導は、附属学校の使命である。幼稚園教諭の仕事に従事したい学生、または小学校等の教師を目指し、そのために幼児教育を基礎として学びたいという学生に対

・附属幼稚園

して、教育実習の場を提供している。

(1) 事前指導

教育実習の事前指導には、4月末から6月までの木曜日を中心に4日間の日程で、全教諭が関わって、保育参観、保育参加、保育研究、講話を担当している。事前指導が課せられていない2週間実習の学生に対しても、希望があれば講義等を受けられるようにしている。

(2) 本実習

教育実習は、6月に2週間、9月に4週間行っている。年齢の低い園児が通常の生活を続けられるように、1学級に配属する学生の数を3名程度に制限し、総数15名までを基準として受け入れている。保育観察から始め、保育参加を経て徐々に保育担当に移行するようにカリキュラムを作成し、学生が意欲を持ちつつ、無理なく実習できるように配慮している。実習生は、保育終了後話し合いの時間を持ち、保育の反省・評価及び翌日の保育計画について担当教諭から指導を受ける。実習後半には研究保育を行い、全実習生と教諭、大学教員の参加を求め、反省会を行っている。教育実習委員会で協議・検討しながら、学生にも園児にも効果的な教育実習ができるようにと考えている。

[点検・評価と改善の方策]

教師の資質が以前にも増して問われている昨今、教育実習の役割が今まで以上に重視されている。また、幼児の育つ環境の変化により、集団での教育が難しいと思われる子どもが増えている現状で、実習生の課題も多くなっている。幼児教育を担う学生の育成のために、本実習以外にも、実習終了後の学生が引き続き保育体験ができる場として保育サポーターの制度を創設したり、学生が園児と触れ合う時間・機会を設けたりなど、幼稚園が現場を体験し、幼児についての知識を高める場となることが今まで以上に求められている。

奈良教育大学の学生や卒業生だけでなく、他大学の学生に対しても、希望があれば実習校として受け入れ、幼稚園教員の育成に貢献していきたい。

4 . 大学との連携

[現状の説明]

大学の附属学校協議会、教育実習委員会、安全衛生委員会、自然環境教育センター運営委員会等に附属教員も参加して、大学との情報の共有を行っている。

また、教育実習をはじめ、共同研究、人材や施設の活用等により、今まで以上に大学との連携を深めることができている。

(1) 教育研究での連携

附属幼稚園での研究は、今日的課題をテーマとして捉え、学長裁量経費を取得するとともに、大学の幼児教育教員の指導を受けて、研究を行っている(2.(2) 研究活動の項を参照)。そのほかに、大学教員の専門を生かした共同研究を実施し、大学教員との共著で『教育実践総合センター研究紀要』及び『附属自然環境教育センター紀要』に掲載された業績を下記に示す(資料3 - 9)。

大学との共同研究(学内紀要掲載分)

論 文 等 名	紀要	年 月
保育参加による大学授業の改善 附属幼稚園との連携による「幼児と環境」の実践を通して	実	H17(2005).3
自然物を採り入れた保育実践の研究 幼児の豊かな感性を育てることを目指して	実	H18(2006).3
奈良教育大学附属幼稚園におけるセミ類の発生に関する研究 奈良教育大学構内との比較	自	H19(2007).3
自然素材を活かした幼児の感性を高める保育実践の研究 土・砂との触れ合いを中心に	実	H19(2007).3
4歳児の家庭における絵本体験の特徴 幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析	実	H19(2007).3

(備考) 紀要欄の区分は、次のとおり。

実：教育実践総合センター研究紀要

自：附属自然環境教育センター紀要

セミの研究では、大学教員との併任である園長の立場を活用し、専門性を生かした園児指導を行い、園児の参加を得ての共同研究として取り組んだ。また、平成 19(2007)年度文部科学省専門職大学院等教育推進プログラムとして採用された幼保統合の「保育実践知」教育プログラムの連携機関として協力している。

(2) 幼稚園運営への大学の協力

附属幼稚園は、年に2回、幼児教育関係者のニーズに応えるテーマを設定し、幼児教育セミナーを開催している(資料3 - 12)。幼児教育セミナーは、参加者の討議と、テーマに即した専門分野の大学教員による講義とを組み合わせ実施している。大学の協力の下、多くの学習の機会を得られたとの成果が、参加者のアンケートにより確認されている。

「幼児教育セミナー」一覧

回	年 月	講 義	講 師
1	H16(2004).2	絵本ではぐくむことばと心	横山真貴子
2	H16(2004).11	少子化時代の子育て支援 保護者との連携から連帯へ	瓜生淑子
3	H17(2005).2	どの子にも幼児にふさわしい生活を 特別な配慮を必要とする視点から	越野和之
4	H17(2005).5	幼児の発達に即した生活を考える	玉村公仁彦
5	H18(2006).2	運動遊び指導に必要な幼稚園の実践的能力	中井隆司

・ 附属幼稚園

6	H18(2006).11	生き物教育のあり方	前田喜四雄
7	H19(2007).2	子どもの発達について	郷間英世
8	H19(2007).6	子どもへのまなざし	上野ひろ美
9	H20(2008).2	幼小の接続	小柳和喜雄

また、附属幼稚園在園の保護者を対象にした「保護者のための大学講座」を企画し、保護者にとって関心のある内容の講義を大学で受けられるようにした(資料3-13)。毎回多くの参加者があり、園児を預けている時間を有効に使い、学生に戻ったように勉強ができた、継続を望む声が多い。

「保護者のための大学講座」一覧

回	年 月	講 義	講 師
1	H16(2004).12	おもちゃ、絵本と子どもの発達	玉村公仁彦
2	H18(2006).1	子どもの行動に“応える”ということ!	杉若弘子
3	H19(2007).1	子育ての中で大切にしたいこと	藤田正
4	H20(2008).1	子どもの手先を不器用にしない	谷口義昭

また、以下に示すように、多くの大学教員の協力を得て研究室を訪問したり、大学構内の施設を活用した取組をしたり、大学の附属幼稚園として大学の人材や施設を保育に活かしている。

大学の施設を活用した取組

・ 大学図書館の「絵本の広場」の利用	
・ 学内散歩や落ち葉拾い	
・ 園児が少人数のグループに分かれて研究室を見学する「研究室探検」(資料3-14)	
平成 15(2003)年度	民族衣装体験(鈴木研究室) リスとの触れ合い(鳥居研究室) 手作り絵本見学(梶田研究室) 液状化実験(平賀研究室) ロボット(堀端研究室)
平成 17(2005)年度	NSのHP見学(情報センター) 木の実の飾り作り(岡村研究室) 運動遊び(中井研究室) 絵本見学(資料館) 動物の話(前田研究室) ロボット(堀端研究室) 楽器演奏の鑑賞(学生サークル)
平成 19(2007)年度	絵本の広場(図書館) 液状化実験(平賀研究室) インターネット体験(情報センター) 木の玩具遊び(谷口研究室) コウモリ(前田研究室)

(3) 教育実習以外の大学への協力

学生と園児の交流の場の提供

大学の授業の一環として、園施設や園環境の観察、園児の行動観察などに協力している。また、学生が授業や卒業制作で作った遊具を園児の遊びに活用したり、自作の音楽を演奏したりする機会を設け、実践活動の場となっている。

卒論調査・研究への協力

幼児教育に関わるテーマの卒論に使う観察や保護者へのアンケートなど、卒論研究や

調査のフィールドとして学生を受け入れている。併せて教師が学生の質問に答えたり調査への助言をしたりして、研究の手助けをしている。

現代教師論の講義と観察

幼稚園についての概略の講義と自由観察を行い、教育現場を学生に体感させることで教師への意欲を高める。

保育サポーター制度

教育実習を終えた学生が定期的に保育を体験できるように、保育サポーターの制度を構築した。毎年、教育実習を終えた4回生の数人が参加しており、保育現場での実績を積んで、教師になるための力量を高めることができた。

[点検・評価と改善の方策]

平成 19(2007)年度からは、「特別に配慮が必要な幼児について」の研究を進めている。大学の特別支援教育研究センターと連携し、昨今増えてきている特別支援が必要な幼児の教育相談や発達検査などで関係機関の協力を得るだけでなく、大学教員を交えてのケース・カンファレンス(case conference)を行い、研究を深めている。今後、同センターの役割の拡大に伴って、附属幼稚園が幼児対象の実践の場として連携することも考えていきたい。

現在の大学のカリキュラムでは、2回生が教育現場を体験する機会がないことから、2回生が園児と関わる体験ができるような授業を工夫するなど、教育実習委員会とともに検討していきたい。

幼小連携の重要性が高まってきている。平成 18(2006)年に3附属の教員と大学教員によるワーキンググループを設置し、3附属の共同研究に向けて検討を始めている。大学の附属である良さを生かし、大学教員とともに今日的課題を捉えて、3附属が統一した研究テーマを持って実践を生かした研究ができるように話し合いを進めていきたい。

5 . 園児の募集と連絡進学

[現状の説明]

園児が毎日通園することを考慮に入れて、健康と安全の面から出願資格を次のとおり定めている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 奈良市内（一部地域を除く）に保護者とともに在住していること。・ 登降園時に付き添いがあること。・ 公共の乗り物と徒歩で通園すること。 |
|--|

・ 附属幼稚園

入園者の決定は、抽選により行っている。附属幼稚園は、特定の幼児を対象とした教育を目指すのではなく、公立幼稚園と同じように多様な子どもを受け入れ、お互いが共に生活する中で育ちあうことを大事にしたいと考えている。附属幼稚園の役割である教育研究及び教育実習を行う上でも、さらには大学教員や学生の研究フィールドとなることを考えても、地域のモデル園として他の幼稚園とほぼ同じ教育条件であることに大きな意味があると思われる。

転入園

学年途中の転入園は、年長1学期終了までに該当学年に欠員がある場合に受け入れている。対象は、附属幼稚園に在籍中に転出し再度転入を希望する者、及び他の国立大学法人附属幼稚園からの転入を希望する者としている。

附属小学校への連絡進学

卒園児の大半は、附属小学校に連絡進学している（第 章 附属小学校 5 . 参照）。定期的に幼・小連絡会を持つなどして附属小学校と連絡を密に取り合い、子どもたちの成長を継続的に支えていくようにしている。また、園児が小学校授業見学会を行ったり、小学生と一緒に遊ぶ時間を設けたりして、園児にとっての小学校への円滑な接続を目指す。しかし、附属小学校と通学区域が違う地域があるため、一部連絡進学ができない状況が生じている。

[点検・評価と改善の方策]

附属幼稚園では、様々な幼児を受け入れ保育を行っているが、近年、特別な教育的配慮を必要とする幼児が増える現状がある。大学の専任教員の指導やアドバイスを受け、適切な教育ができるように努力をしている。大学に要望して非常勤講師を配置してもらってはいるものの、教師の人員は十分ではなく、学生ボランティアの助けを加えても、担任にかかる負担は大きくなりがちである。保護者と十分に話し合いを重ね、附属幼稚園の現状について理解を得ながら、特別支援児にとってもより良い教育環境を確保できるように努力していきたい。

また、校区内の未就園児が減少傾向にあるのに伴って、入園を希望する幼児も減少してきている。公共の乗り物を使っての通園やお弁当持参など、今の保護者の要望とは合わない点もあるが、幼児期の成長に必要な内容であると考え、保護者の理解を求めながらそれらの条件は残したいと考えている。校区を広げると対象幼児は増えるが、年齢の低い幼児が電車等を利用し遠距離を通園することになり、望ましいこととは考えにくい。理念に基づいた教育を進めながら、希望の少ない2年保育児の募集定員を減らすなど、今後の対策を検討する必要がある。

6 . 組織と運営

[現状の説明]

(1) 教職員の配置

教員組織は、園長、副園長、主任教諭、教諭、養護教諭、非常勤講師で構成される。主任教諭と教諭 4 名で 5 学級を担当している。講師は 3 歳児の副担任、保育補助、特別な教育的配慮を必要とする子どもの個別指導に当たっている。

職員は事務職員 1 名のほか、定員外教務補佐員 2 名がおやつと用務を担当している。

(2) 園務分掌

現在、附属幼稚園を運営するための主たる業務は、教務、研究、教育実習、図書、厚生、養護、安全、飼育栽培等であり、園務分掌に基づいて全教諭が分担して行っている。少ない教職員で運営しているため、1 人で多くの園務を担当し、仕事をこなさなければならない課題を抱えている。毎月 2 回の職員会議を開き、保育に関する内容、園行事、予算、評価などについて園長を中心として協議を行っている。その他、定例の研究会議、教育実習会議を担当の教諭が必要に応じて招集している。

(3) その他の組織

幼稚園・小学校・中学校の 3 附属学校の間には、3 附属連絡協議会があり、学期に 1 回の開催で、附属学校間の問題について協議し、連携を深めている。附属学校協議会では、大学と附属学校の情報を共有し、附属学校の運営に関して大学の協力を仰いでいる。対外的には、全国附属学校連盟、近畿附属学校連盟に所属し、研究会に参加したり研究協議や情報交換などを行ったりしている。附属学校以外では、国公立幼稚園の組織である奈良県幼稚園長会・幼児教育研究会に所属し、平成 19(2007)年度には県幼稚園長会が所属する第 54 回全国国公立幼稚園研究協議会奈良大会が開催され、大会実行副委員長・研究部長、提案発表、研究委員として貢献するなど、地域の幼稚園と様々な交流を行っている(資料 3 - 7)。

(4) 学校評議員の活用

附属幼稚園に学校評議員を置き、地域の有識者、保育園長、公立幼稚園長、その他の幼児教育関係者、元附属幼稚園副園長の 5 名に委嘱している。1 年に 3 回の会議を開催し、附属幼稚園の運営・教育のあり方・施設設備に関して意見や提案を聞く場としている。年度当初には、前年度の保護者アンケート結果(資料 3 - 10)や幼稚園運営に関する自己評価を示し、外部評価者として意見を出してもらっている。学校評議員会で出された意見について検討し、運営に反映させている(資料 3 - 15)。

・ 附属幼稚園

学校評議員会の議題等一覧

年 度	議 題	意 見 等
H16(2004)	法人化後の幼稚園について、学校評価	
H17(2005)	これからの附属幼稚園のあり方、公開保育研究会について、幼稚園評価	研究会の日程を土曜日にして参加しやすいようにする。園庭開放の回数を増やす。
H18(2006)	平成 17(2005)年度保護者評価、大学との連携(保育参観)、安全対策について	大学や、学生、自然豊かな森を有効に活用する。子どもに危機管理の力をつける。
H19(2007)	平成 18(2006)年度保護者評価、公開保育研究会について、組織・運営について	自由参加の懇談会の参加が増えるような工夫をする。

(5) 学校評価と情報の公表

保護者による評価として、幼稚園の運営や教育活動についての保護者アンケートを毎年度末に実施し、その結果は在園児保護者に伝えている。未就園児の保護者に対しても、入園説明会等の機会を利用して公表している。そのほか、附属幼稚園の情報としてホームページの充実を図るとともに、『幼稚園要覧』をわかりやすく工夫し、外部の者にも見やすいものとした(資料3-16)。

[点検・評価と改善の方策]

幼稚園の1学級の定員は、4・5歳児は35名と決められている。しかし、集団に慣れていない子どもが増え、1人の担任教諭が子ども一人ひとりに応じた保育を行うことが難しくなっている。また、子育てに不安を抱える保護者を支えることも、教師に求められる。文部科学省において、幼稚園での1学級30名以下という考えが検討されている。近隣の幼児の減少も考慮すると、附属幼稚園でも、一人ひとりの発達段階や年齢に応じたきめ細かい保育を行う上で、1学級当たりの定員を減らす必要を感じている。

また、個別に配慮の必要な園児も増えてきている。集団としての行動が難しい場合に個別に対応し、成長を支える必要がある。必要なときに人的配置がされるような制度が求められる。

少人数で多くの組織と関わり連携するため、教師1人にかかる負担が大きい。他方、外部の情報を得たり情報を発信したりすることは、今後さらに重要性が増してくるので、効率のよい運営を考えていく必要がある。

7 . 安全管理

[現状の説明]

(1) 不審者への対策

園児が登降園する時間には、正門にガードマンを配置するとともに、教職員が交替で正

門に立ち、不審者の侵入を警戒している。それ以外の時間には門を施錠し、必要な出入りはインターホンでの確認を行って、通用門を使用する。保護者には、園内では必ず園名入りの名札を着用してもらい、不審者が侵入しにくい環境を作っている。園児及び教職員は、『学校への不審者侵入時の危機管理マニュアル』(資料3-17)に従って不審者対応の訓練を行い、非常時の対応について共通理解し、万が一に備えている。

また、園内だけでなく、園児が家庭に帰ってからの安全意識を向上させるために、警察の協力を得て、保護者を含めた指導教室を開催している。地域の組織で作る安全ネットワークに加わり、地域ぐるみで幼児を守る体制も構築している。

(2) 遊具等の安全対策

遊具の不備による事故を防ぐために、毎年、長期休業中に遊具の点検を業者に委託して実施しており、その結果に基づき必要な箇所を修理している。また高さのある遊具の周囲には、草面または人工芝を配し、安全面に配慮している。

正門から保育室までの通路には、老朽化によりアスファルト面に尖った石が浮き出てきていた。平成18(2006)年に大学予算により石畳に改修され、園児や未就園児の怪我が大幅に減り、景観も良くなった。

また、砂場の砂は園児が直接触れるものであるため、保育終了後は砂場をネットで覆い犬猫の糞が入らないようにするとともに、学期ごとに砂の消毒を行い、衛生面にも配慮している。

(3) その他の安全管理

安全の年間計画及び『学校安全管理マニュアル』(資料3-18)に従って、火災と地震を想定して園児の訓練を行っている。また、日頃から職員研修を実施し、避難経路の点検を行うなど、園児の安全を第一に考えるようにしている。

園児に対して紫外線対策を行っている。園児には戸外で遊ぶときには後頭部を覆う帽子を着用するよう指導している。同時に、戸外の遊び場にはテントやパラソルを配置したり、砂場の上には日よけネットを設置したりするなど、過度に日差しを浴びることのないよう安全な環境作りを図っている。

また、毎年、教職員を対象とした救急講習を行い、AEDの扱いや幼児向け救命救急、幼児の健康管理についての講習を受けている。

[点検・評価と改善の方策]

安全には、園周辺地域との連携が不可欠である。そのため、周辺の学校組織との防犯一斉降園の取組や安全情報の共有のための会合など、地域からの呼びかけには積極的に答えていきたい。また、安全教育の一環で地域の警察や消防署の協力を得るようにし、園児が自ら安全の知識を身に付けるだけでなく、地域と関わって皆に守られていることを意識付けたい。

園児にふさわしい環境として木製の遊具を設置しているが、徐々に木製部の老朽化による修理に経費がかかることと、耐久年数に限りがあることから、大型遊具の買い替えを行

・ 附属幼稚園

う必要が生じてくる。また、大学に通じる裏門は保育中には施錠しているが、開錠のたびに職員が裏門まで行かなければならないので、人的余裕のない幼稚園では、自動開錠の出来る門扉の設置が望まれる。

8 . 施設・設備

[現状の説明]

園舎は、年中・少児用と年長児用の保育室が各1棟ずつ、遊戯室、管理棟、研究保育室がある。保健室は管理棟内にあり、園庭から出入りできるようになっている。研究保育室は実習期間以外には、PTA活動や絵本の貸し出しの部屋として使用しているが、子育て支援のための未就園児サークルや保護者のクラブ活動等に要望に応じていつでも使える部屋がなく、苦慮している。また、保育室周りのテラスが狭いため、雨の日の遊び場の確保や移動に不便を感じている。

長年の要望事項であった大人用男女別トイレが改修されたことで、父親の園行事参加を促し、保護者が安心して使用できるようになった。また、老朽化により傷んでいた園内の通路も改修され、園児の怪我が減少し安心して生活できるようになった。少しずつではあるが、保護者や園児にとって安心・安全な施設・設備が整備されてきた。

広い運動場には、幼児の身体の発達に応じて運動できるように、総合遊具を始め、鉄棒、うんてい、土山、回転遊具等が設置されている。「子どもの森」は四季折々の自然が豊かであり、木登りや虫取りなど自然環境を生かしての遊びや自然との触れ合いを園児に体験させることができる。

[点検・評価と改善の方策]

平成12(2000)年に保健室を、平成18(2006)年に大人用の男女別便所を設置し、園児にも保護者にも使いやすい環境となった。しかし、PTA活動をはじめとして盛んになっている保護者のサークル活動、未就園児の子育て支援などに使用する部屋はなく、保育研究室を充てている。このため、園児や保護者が様々な活動に応じて多目的に使える部屋の設置が望まれる。また、保育室周辺のテラスの屋根を広くするなどして、園児が雨の日でも十分に活動できるスペースを考えていきたい。

総合遊具は木製であるために、毎年業者による安全点検を行っているが、徐々に老朽化が進み、安全面から買い替えが必要になってくる。幼児にとって、遊具は遊びへの誘発・運動面の発育にとって必要なものであり、園として望ましい遊びができるような設備を備えていきたい。

また、大学に隣接している地の利を生かして、園内だけでなく大学の「絵本のひろば」を始め、大学施設の活用を工夫して保育を豊かにしていきたい。

9 . 地域社会への寄与

[現状の説明]

(1) 他の幼稚園とのつながり

平成 15(2003)年から、「幼児教育セミナー」を学期に一度の頻度で開催しており、地域の幼児教育関係者に参加を呼びかけて、現職教員の学習の場を提供している(資料3-12)。セミナーは気軽に参加できるように土曜日に設定し、テーマに沿っての意見交換と大学教員による講義とを組み合わせた構成としている。セミナーでは新しい参加者を加えて、毎回の参加者数が概ね定着してきている。参加者のアンケートから、有意義な研修となっていることが伺える。

また、奈良県幼稚園長会、教育研究会など地域の組織に役員として積極的に参加し、奈良県内の公私立幼稚園と連携交流し、研究会の提案発表や研究紀要の作成など、研究面を中心に役割を果たしている。

大学の附属学校で組織する全国附属学校連盟幼稚園部(全附連)や、近畿地区の大学附属幼稚園と連携し、情報を得るだけでなく、研修会に積極的に参加し研究発表を行ったり(資料3-6、3-7)研究成果を全附連リーフレットに寄稿したりなどして(資料3-8)自園の研究成果を広く発信している。養護教諭は、中央教育審議会の学校健康・安全部会の専門委員としての使命を受け、活動している(資料3-19)。

(2) 子育て支援

保育終了後の運動場や森を、地域の未就園児の遊び場として月1回開放している(資料3-20)。その機会を利用し、子育て中の保護者が必要に応じて教育相談できる場を作っている。また、地域の子育てサークルの活動の場として施設を提供している(資料3-21)。年間600組近い参加があり、母親指導者の相談役として、小さい子どもを持つ母親が安心して集い、子育て出来るように支援している。

(3) その他の地域連携

幼児を守る安全ネットワーク等、地域との連携が不可欠となってきている。緊急時の連携だけでなく、日頃から地域との関係を築くために、通園路の清掃活動や、親子で登園する際に路上等のごみを拾い集めてくる「クリーンデー」の取組を行っている。活動を通じて、地域を汚さない、きれいに保つことの大切さが園児にも伝わることも期待している。

また、地域の公立中学校の取組である職場体験学習の場として希望者を受け入れたり、地域の保育園に園庭を開放したりするなど、地域との連携を積極的に行っている。

[点検・評価と改善の方策]

幼児教育セミナーでは、今後も幼稚園、保育園、幼児教育を学ぶ学生などに広く参加を

・附属幼稚園

呼びかけるとともに、今日的なテーマを設定し、保育に携わる者が学ぶことのできる場を提供し、教員の資質の向上に貢献していきたい。幼児教育に携わる本学の卒業生にも働きかけ、経験の少ない若い教師の研修の場としても定着させていきたい。

また、これからの幼稚園は、地域に開かれた場として、幼稚園が地域を活用し保育の実践に役立てる工夫をするとともに、地域の要求を受け入れるなど、互いの良さを生かした連携が必要になってくる。地域の保護者の要望を汲み取り、未就園児には安心して遊べる場所を提供し、同時に母親が教育相談を受けることができるようにして、地域の子育て支援の役割も担っていきたい。

10. 資料一覧

- 資料3 - 1 : 『教育課程 2001』奈良教育大学教育学部附属幼稚園、平成 13 年 11 月
- 資料3 - 2 : 『幼児の生活をみつめる「親子で育つ幼稚園をめざして」子育てにおける父親の役割』奈良教育大学教育学部附属幼稚園、2005 年 3 月
- 資料3 - 3 : 『「自尊心の育ちを考える」かけがえのない自分を大切に思う心を育む』奈良教育大学教育学部附属幼稚園、2005 年 11 月
- 資料3 - 4 : 公開保育研究会案内文書(平成 15 年度～19 年度)
- 資料3 - 5 : 「平成 18 年度奈良県養護教育研究大会」(平成 19 年 3 月)における附属幼稚園関係資料
- 資料3 - 6 : 「平成 19 年度第 53 回幼稚園教育研究集会広島三原大会」(平成 19 年 7 月)における附属幼稚園関係資料
- 資料3 - 7 : 「第 54 回全国国公立幼稚園教育研究協議会奈良大会」(平成 19 年 7 月)における附属幼稚園関係資料
- 資料3 - 8 : 説明資料「自尊心の育ちを考える - かけがえのない自分を大切に思う心を育む - 」
- 資料3 - 9 : 共同研究論文抜刷の表紙(5 本分)
- 資料3 - 10 : 『2006 年度「本園の教育に関するアンケート」結果報告』奈良教育大学附属幼稚園、2007 年 4 月 9 日
- 資料3 - 11 : 公文書「研修会の講師について(講師依頼)」平成 19 年 8 月 14 日宝教委学教第 516 号、宝塚市教育長発出
- 資料3 - 12 : 幼児教育セミナー案内文書(第 1 回～第 8 回)、参加者アンケート(第 3 回、第 5 回、第 7 回)
- 資料3 - 13 : 『附属幼稚園保護者のための大学講座のご案内』平成 16 年度、平成 18 年 2 月、平成 19 年 1 月 12 日、平成 20 年 1 月 9 日分及び「講座についてのアンケート集計」
- 資料3 - 14 : 大学探検遠足保育案(平成 14 年度、16 年度、18 年度)
- 資料3 - 15 : 附属学校学校評議員会の開催依頼・記録等(平成 15 年度～19 年度)
- 資料3 - 16 : 幼稚園要覧『奈良教育大学附属幼稚園へようこそ』

- 資料 3 - 17 : 『学校への不審者侵入時の危機管理マニュアル 附属幼稚園における防犯対策（不審者侵入への対応と幼児の安全確保）』奈良教育大学附属幼稚園
- 資料 3 - 18 : 『学校安全管理マニュアル 附属幼稚園における安全対策（火災・地震発生時の対応と幼児の安全確保）』奈良教育大学附属幼稚園
- 資料 3 - 19 : 公文書「人事異動通知書（中央教育審議会専門委員任命）」（平成 19 年 4 月 27 日 文部科学大臣）
- 資料 3 - 20 : 案内「奈良教育大学附属幼稚園 未就園児のための園庭開放」2005 年度～2007 年度、及び「未就園児園庭開放についてのアンケート結果」2005 年度、2006 年度
- 資料 3 - 21 : 案内「すくすくくらぶ」2006 年度前期・後期、2007 年度前期・後期

以下は、本文引用外の実績資料

- 参考 3 - 1 : 「教育課程研究指定校事業希望調書」平成 18・19 年度、平成 19・20 年度
- 参考 3 - 2 : 「日本教育大学協会養護教諭部門全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会第 42 回研究協議会・総会」（平成 19 年 8 月）における附属幼稚園関係資料

. 附属幼稚園